



Title	シスプラチンによる骨格筋萎縮発症機序に関する基礎的研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	松本, 千波
Citation	北海道大学. 博士(薬科学) 甲第15161号
Issue Date	2022-09-26
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/87210">http://hdl.handle.net/2115/87210</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Chinami_Matsumoto_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（薬科学） 氏名 松本千波

審査担当者	主査	教授	南 雅 文
	副査	教授	大 西 俊 介
	副査	講 師	大久保 直 登
	副査	名誉教授	武 田 宏 司

## 学位論文題名

シスプラチンによる骨格筋萎縮発症機序に関する基礎的研究

博士学位論文審査等の結果について（報告）

シスプラチンは、消化器癌、肺癌など様々な癌の治療に広く使用されている抗癌剤であるが、腎障害、神経障害、内耳障害など重篤な副作用を伴うことが多く、これらは化学療法を完遂する上で大きな妨げとなる。さらに、シスプラチンが骨格筋萎縮をもたらすことが最近明らかとなってきた。骨格筋萎縮は、化学療法中の癌患者の QOL を低下させ、生命予後に影響を与えており、その病態解明や予防・治療法の開発は重要な課題である。

筋萎縮には、蛋白質の分解と合成を制御する多様なシグナル伝達経路が関与している。シスプラチンは、筋特異的ユビキチンリガーゼ Atrogin-1 と MuRF1 を活性化することが明らかになっているが、その分子メカニズムについては不明な点が多い。一方、シスプラチンの抗癌作用並びに副作用の発症にアポトーシスが関与し、その機序にミトコンドリア障害が介在していることが示唆されている。ミトコンドリアは、アポトーシス誘導以外にも ATP 産生、活性酸素種の生成などの多くの細胞機能を制御する重要な役割を担っている。最近、動物実験において、シスプラチンが骨格筋のミトコンドリア障害を引き起こすことが報告されたが、その機序や筋萎縮との因果関係については検討されていない。

本論文は、このような現況において、シスプラチン誘発マウス C2C12 筋管細胞萎縮モデルを作製し、シスプラチンによる筋管細胞萎縮および筋特異的ユビキチンリガーゼの活性化とミトコンドリア障害の関連性について明らかにすることを目的としたものである。さらに、シスプラチン誘発筋萎縮モデルマウスに関する基礎的検討を行い、補中益気湯の効果を検討している。

最初に、C2C12 筋管細胞の生存と萎縮におけるシスプラチンの影響を評価した。50  $\mu$ mol/L シスプラチンで 24 時間処理した C2C12 筋管細胞は、アポトーシスを誘導することなく細胞萎縮し、ミオシン重鎖 (MyHC) 蛋白質量が減少した。また、Atrogin-1 および MuRF1 mRNA 発現レベルが上昇した。次に筋管細胞萎縮におけるミトコンドリア障害と活性酸素生成の関連性を検討した。シスプラチン処理 2 時間後にミトコンドリア活性酸素レベルの一過性の増加が観察され、その後 24 時間まで細胞内活性酸素レベルの持続的な増加が認められた。また、6 時間以降にアポトーシス制御因子 Bax mRNA の発現レベルが上昇し、Bcl-2 mRNA の発現レベルが減少した。さらに、シスプラチン処理により、ミトコンドリアの酸化的リン酸化の指標である酸素消費速度の低下、解糖の指標である細胞外酸性化速度の低下および ATP 産生の低下が認められた。以上より、シスプラチンは筋管細胞においてミトコンドリア機能障害を引き起こすことが明らかとなり、これが筋管細胞萎縮をもたらす可能性が示唆された。これを確かめるため、ミトコンドリアを標的とした抗酸化物質 Mitoquinone mesylate (MitoQ) の効果を検討した。MitoQ はシスプラチン処理筋管細胞において、細胞内活性酸素を減少させ、Bax および Bcl-2 mRNA の変化を緩和した。さらに MitoQ はシスプラチンによる Atrogin-1 mRNA 増加を抑制し、MyHC 蛋白質量を増加させた。一方、MitoQ は ATP 産生速度および細胞内 ATP 量を改善しなかった。以上より、シスプラチンによる

Atrogin-1/MuRF1 活性化には、ミトコンドリア障害と、それともなう持続的な活性酸素上昇が主要な役割を果たしていることが明らかとなった。また、シスプラチンにより、Bax/Bcl-2 比が変動することが明らかとなったことから、シスプラチン処理による筋管細胞萎縮モデルにおける p53 の関与について検討した結果、シスプラチンは p53 を活性化させ、筋管細胞のミトコンドリア障害と細胞萎縮を引き起こす可能性が示された。最後に、マウスにシスプラチンを投与して筋萎縮モデルを作製し、骨格筋重量とその制御因子について検討した。その結果、シスプラチン投与により腓腹筋の重量と握力の低下が認められ、その機序として、腓腹筋の Atrogin-1 mRNA の増加およびミトコンドリア DNA 量の低下の関与が示唆された。さらに、補中益気湯がシスプラチン誘発筋萎縮を改善する効果を有していることが明らかとなった。

これを要するに、シスプラチンによる筋萎縮の発症には、活性酸素発生と p53 活性化によるミトコンドリア機能低下が関与するという新知見を得たものであり、加えて、ミトコンドリアを保護することが、シスプラチン系化学療法による筋萎縮の予防・治療に有用であることを示唆する新知見も得ていることから、癌化学療法による筋萎縮のメカニズムの理解や、その治療法に関する研究の進展に貢献するところ大なるものがある。

よって著者は、北海道大学博士（薬科学）の学位を授与される資格あるものと認める。